



# きらつと教育

今回から、11回シリーズで、星美学園短期大学で保育者を目指している学生さんへ教鞭をとっているサレジアン・シスターズのSr. 田中に「サレジアンとしての保育者像 —ドン・ボスコの予防教育法のスタイルで—」の原稿を提供していただきました。

サレジアンの保育者に向けての内容ですが、ドン・ボスコ生誕200周年の閉幕後の、新たな心で歩みだしている私達にも多くのヒントがありますので、皆さんの置かれた状況に合わせて読み替えてみてはいかがでしょうか？

## 第1回：ドン・ボスコの教育理念と子ども像 ～教育理念～

ドン・ボスコの教育は、キリスト教精神に基づく**バランスのとれた人間教育**であると言えます。ドン・ボスコはこの「**バランスのとれた**」ということと「**人間味のある**」ということをととても強調しました。

それは、

- ・自分の今やるべき務めを誠実に果たし、
- ・喜びをもって快活に人と交わることができ、
- ・注意深い目と心で他者の必要にも気づき、手をさしのべることができる。

そんな**精神的に安定してバランスのとれた人間を育てる**ことを第一としました。

そのような人間を育てるために、彼は人間の深い本性、すなわち**理性・宗教・慈愛**に働きかけることを第一の手段としました。これが**ドン・ボスコの教育法の3本柱**と言われるものです。

### ① 理性 (Ragione)

まず「**理性 (Ragione)**」とは、物事の価値と意味を把握する能力のことで、子どもたちの理性に訴えるには、常に**相互理解と親しみある対話、絶え間ない忍耐**が不可欠となってきます。いわゆる「てこでも動かない」という言葉がありますが、たとえ体重が20キロに満たない幼児でも、「納得」しなければ動かないことがあります。また、脅されて、おだてられて動いたとしても、それは「納得」して動いたのとは違います。まだ理屈が理解できないと思われる幼児であっても、親しみある対話と絶え間ない忍耐をもって、ドンボスコが少年達に対してそうであったように、サレジアンの保育者は、幼な子の心を勝ち取ることができるのです。

そして「**理性**」に基づく教育は、「**均衡・バランス感覚 = 節度と現実性に基づくコントロール**」や「**識別の能力 = より良きものを識別し、選び取っていく能力**」を養うことも目指します。

「**理性**」は「**知性**」とは違います。すべての物事に「**理 (ことわり)**」があるのです。世の中の「**理**」を司っている方の存在を感じることで、これが「**理性**」への教育だと思います。これは幼児期に非常に大切です。自分本位、人間本意の考え方に傾きがちな傾向を押さえることができます。そしてドン・ボスコは、この教育を通して**子どもたちが将来円満な人格、円満な家庭、秩序ある社会を築く**ことを目指しました。

では、幼児はどのようにして、この「**世の中を司っている方の存在**」に気づいていくのでしょうか。神様の存在を感じさせるような物的環境や、静かに祈る時間や雰囲気づくりなども大切ですが、何よりも、幼児のそば近くにおいて、幼児と共に生活する大人が、その存在を認めているかどうか、どのように考え、どのような言葉を発し、どのように行動しているかが重要でしょう。

**Q1 カトリックの園で子どもたちと共に過ごす保育者である私たちは、「世の中を司っている方の存在」に気づいたことはありますか。**

**あるとしたらそれはどのような時ですか。子どもたちにそれを知らせたことはありますか。**